始

327-842

人生の幸福に關する卑見を綴りて、一小冊子と爲し、之を父の御聲と名附け、祖先の墓前に供ふることゝ爲しぬ。

大正五年五月二十七日

川田鐵彌

父の御聲

目次

序……一
文……一
碑……一
健康の快樂……八
家庭の團欒……一四
讀書の趣味……二三
自然に對する愛好……

發行所
寄贈本
大正
5. 6.12
寄贈

七、生産的勤勞……二七
八、公共的事業に對する同情……三四
九、崇祖の氣高き精神……四〇
一〇、餘韻……四七

父の御聲

小序

皇紀二千五百七十三年五月二十七日は、高千穗學校創立十周年の記念日でありました。その日に、校庭へ記念碑を建てました。その記念碑の表には、英文で人生の幸福に關する綱目を載せ、その譯文を裏に記して置きました。世の中のことは、月日の立つに伴れ、いろ〳〵と移り變るものであります。しかし、何時の世でも、人類の幸福を增進する上に於て、朝夕心掛けねばならぬ點は、大體、

一、健康の快樂
二、家庭の團欒
三、讀書の趣味
四、自然に對する愛好

五、生産的勤勞
六、公共的事業に對する同情
七、崇祖の氣高き精神

右の七大綱目であらうと存じます。この綱目を服膺の上、子孫長久の道を計りたいと思ひ、そのよしを碑文に綴りました。

人生は我の中に、尙一の我があつて、絶えず眞我を裏切り易いものであります。それ故、碑の篆額に、

常識＋信念＝物質＋X
無窮大＋O＝不滅不死

右の方程式を掲げ、我を離れて、高所から世の中を達觀しながら、一生懸命に、人事に努力することが大切であることを示しました。而してこの父の御聲と題せる小册子は、如上の意を寓した方程式と、人生の幸福に關する七大綱目との大意を述べたものであります。

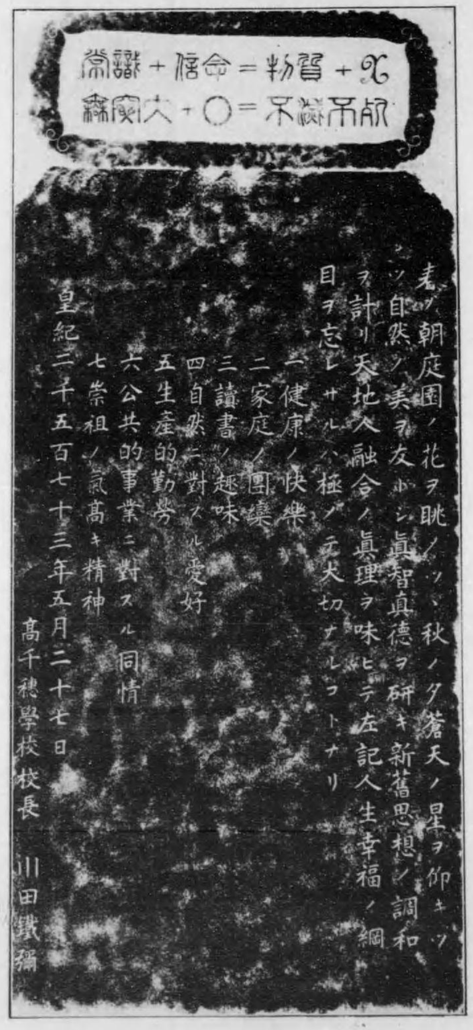
COMMON SENSE + RELIGION = MORE SENSE + X.
CONFIDENCE + O = IMMORTALITY.

When admiring on a spring morning the flowers of the garden, or gazing on an autumn night at the stars of the clear sky, we make the beauty of nature our companion, cultivate true knowledge and true virtue, endeavour to reconcile new ideas and old, and to appreciate the principle of the harmony of the universe, it is most important that we should not lose sight of the following factors of human happiness:-

1. Enjoyment of Perfect Health;
2. Domestic Harmony;
3. Taste for Readiness;
4. Love of Nature;
5. Productive Services;
6. Sympathy with Public Enterprises;
7. Noble Spirit of Ancestorworship.

May 27th, 1913.

T. KAWADA,
Founder and Principal,
Takachiho School,
Tokyo.



教育ハ生命ニ徹シ學問ハ人生ニ不離

春來ル朝庭園ノ花ヲ眺ノツ秋ノ夕蒼天ノ星ヲ仰キツツ自然ノ美ヲ友トシ眞智眞德ヲ研キ新舊思想ノ調和ヲ計リ天地人融合ノ眞理ヲ味ヒテ左記人生幸福ノ綱目ヲ忘レサルハ極メテ大切ナルコトナリ

一 健康ノ快樂
二 家庭ノ團欒
三 讀書ノ趣味
四 自然ニ對スル愛好
五 生産的勤勞
六 公共的事業ニ對スル同情
七 崇祖ノ氣高キ精神

皇紀二千五百七十三年五月二十七日

高千穗學校校長　川田鐵彌

三、健康の快樂

お寶船に乘り、遠く海外へ出掛け、大に通商貿易でも致さうかと云ふ心持を表はした七福神に就いて考へて見ますに、それ〴〵、長所をお持ちになつて居るやうに存じます。諺にも、健全なる精神は、健全なる身體に宿るとある通り、人間が世の中で、立ち働きますには、毘沙門天のやうな、威勢の善い體格でないと、艱難に打ち勝つことは出來ませぬ。身に甲冑を著け、手に戈を執れる勇ましい姿の毘沙門天のやうな丈夫な身體に、浮世の辛酸を嘗めて、經驗に富める、頭の禿げた、壽老人の有せる思慮、靜に落付いたところに、福德圓滿な風の見ゆる、福祿壽の有せる信用を加へますと、誠に申分のない次第であります。

毘沙門天の勇、壽老人の智、福祿壽の仁、いづれも至極結構であります。尙、お寶船には、お腹の大きな、布袋和尙のやうな、度量のある方も居れば、俵

の上に乘つて居られる財政家の大黑天も居られ、それに、いざと云ふ場合には、機會を逃さずに敏捷に立ち働く惠比須三郎、ニコ〳〵と優しく愛嬌ある辨財天も乘り込まれ、なか〳〵、揃ひも揃つた乘組員であります、かゝる觀光團が、世界のはてからはて迄出掛けてまゐれば、到る處で、非常に歡迎せられ、よいお土產を澤山持つて歸らるゝことゝ存じます。

身體を丈夫にいたしますには、貝原益軒先生のやうに、養生に心を用ひ、飲食を制し、規律正しき生活をなし、毎日適當の運動を試み、煙草や酒類などは、之を用ひないことに定め、夜更しをしないやうに、身を愼しむことが肝要であります。而して柔道なり、劍道なり、弓術なり、靜座なり、人の善いと云ふことは、之を試み、常に樂しき希望をゐがいて活動するやうに心掛けねばなりませぬ。

北米の都市ボストンにまゐりました時、ベンヂヤミン、フランクリン氏の墓に詣でまして、不圖、胸の中に氏が晩年に、自分は再び世の中に生れ來たからとて、自分が只今まで送つて來た生涯より、より以上の成績を示すことは出來ぬと申された言を思ひ浮べ、思はず、頭を下げた事でありましたが、成程、氏が少年時代から品性の立派であつたことは、この一言でも分ります。左に氏の所謂十三德を載せることにいたしませう。

一、節制 Temperance. 惰氣生ずるまで食べてはいけませぬ。心亂るまで飲んではいけませぬ。

二、沈默 Silence. 自分のためか、人のためになることの外は、多言しない方がよろしくあります。

三、秩序 Order. 物を散らかさずに、時を守るやうにおしなさい。

四、決斷 Resolution. 定めたことは、仕遂げるやうに氣をつけなさい。

五、儉約 Frugality. 物を無益に費してはなりませぬ。

六、勉勵 Industry. 熱心に勉め勵まねばなりませぬ。

七、誠實 Sincerity. 正直に眞面目におやりなさい。

八、正義 Justice. 人道を重んぜねばなりませぬ。

九、中庸 Moderation. 極端を避け、假令怒るべき事も、之をこらへなさい。

一〇、清潔 Cleanliness. 身體、衣服、住居などを、清潔におしなさい。

一一、靜平 Tranquillity. おちついて、物事にあはてないやうに、氣をつけなさい。

一二、仁愛 Charity. 人には親切にせねばなりませぬ。

一三、謙遜 Humility. クリストやソクラテスの風を學びなさい。

古の人も、慎言語、以養其德。節飲食、以養其體。と申されましたが、酒などは、多量に用ひますと、身の健康を害し、品性を傷ふやうになります。又煙草の中には、ニコチンと申す有毒なものを含んでゐますから、禁煙の美風を守りたいものであります。

幼少な時分から、お丈夫なお方は、養生に心を用ひてさへまゐれば、長生が出來る筈でありますけれども、お丈夫なお方に限り、飲食を制せず、不規則な生活を爲し、それからそれへと、無理な事を遊ばされ、遂に健康を害ひ、早く世を去らるゝやうに存じます。一體、人の體質は、十年毎に多少變るやうに存じます。昔から、厄年など申されますも、一理あることで、その前後は、矢張り、萬事によく氣を付け、餘り無理をしない方がよろしくあります。

人は、長生を致しませぬと、折角の志を仕遂げる譯にまゐりませぬ。私も、四十一の歳に、重い病氣に罹り、九死に一生を得たことでありましたが、全快當時、或先輩が、私をお慰め下さいまして申されました言に、

人は、長く身體を使ふ工夫を、自分でせねばなりませぬ。度々、聞く話でありますが、彼の河越喜多院の南光坊天海などは、百二十二歳まで生きられました、喜多院の再興などは、八十歳の時に、經營に著手せられました。此の時が、慶長の五年で、慶長の十七年に、家康公に、伏見で謁見をせられたのでありますから、其時は、九十一歳の高年であります。其後、將軍家の尊信を得て、三代に歷仕し、一百二十又二歳の珍らしい高齡まで存命

せられました。尤も、天海程の人であつて見れば、五十位でも、凡人の百歳、二百歳に相當する仕事は、仕遂げられたに相違ありませんが、百二十二まで生きられた故に、一層、偉大なる佛力を現はされた譯であります。

要するに、勤勉力行と云ふ事は、極めて大切な事でありますが、それと同時に、勤勉力行を永く續ける事が、肝心であります。永く使へる身を、早く使ひ切るのは、それは、短氣と申すものであります。

幼少な頃には、隨分お弱かつたお方で、攝生に心を用ひ、お年を召すに從ひ、だん〳〵と、御健康になり、長壽を保ち、立派な事業をせられた偉人や、有益な著述をせられた學者などが、少くありませぬ。哲學界の泰斗カント氏なども、その一人で、氏は堪へ且つ忍べ Bear and forbear と云ふ格言に依り、克己耐忍の上、種々の衞生法を實行せられ、日常の生活は、規則正しくいたされ、夜は必ず十時に寢に就き、朝は必ず五時に起き、食後は、雨の日も、雪の朝も、常に散歩に出掛けられたさうであります。それで、薄弱な人でしたけ

れども、八十一歳の高齢まで生き、一大著述を殘されました次第であります。まことに、長命は　人生成功の第一要件かと存じます。誰でも、身體のどこかに、少しでも申分がありますと、身體さへよくなれば、それで澤山である、財産も何も、さほど欲しくないと云ふやうな氣分になるものであります。これから考へましても、身體の健康は、人生の幸福に關する、第一條項に、數へねばならぬことがわかります。それで、古人も、「健康は、幸福の母」と申されました。而して、人の身體は、程よく之を使へば、使ふほどよくなるもので、身體がよくなれば、氣分もさはやかになり、人樣にお目にかゝりても、機嫌よく、ニコ〳〵といたし、それからそれへと、常に希望を抱き、面白く世の中を渡ることが出來ます。

さしのぼる旭の如くさはやかに
もたまほしきは心なりけり

四、家庭の團欒

笑ふ門には福來る、と云ふ語がありますが、家族一同、うち揃ひ、健やかにうち暮し、朝から晩まで、その日その日、機嫌よく睦しく、うち働くは、側から見ても、實に心持の善いものであります。人生は、「元日や今日の心をいつまでも」と申す工合に、毎日〳〵、元旦のやうな氣分で、ニコ〳〵と暮すが、何よりも至極結構なことであります。先づおめでたいお多福のをしへ、五つを申し上げますと、滿面に笑を含めるは、圓滿な人相で、口許の小さいこころは、「よしあしと人をいろひてなにかせんわが身の上のよしあしを知れ」と云ふ歌の心を守り、おしやべりをしない風で、鼻の低いは、謙遜の德、額の高いは、度量を示したものであります。尚、お多福の側に、松のかいてあるは、綠の色かはらぬやうに、貞操の大に頌すべきものがあることを表はしたものであります。

「たらちねの親のみ思ふみとり子の心や人のまことなるらむ」と云ふ歌がありますが、幼兒の物せられました作文に、

私のおとう樣やおかあ樣も、毎日私を、可愛がつて下さいます。又私が御飯をたべないで、學校にいかうとした時、大層心配をして下さいます。もう先のことですが、おとう樣が、大病にかゝつた時、病院に入院をしました。

それから、いつも學校へいつて、歸つて來てから、病院にお見舞にまゐりますと、「戸棚にあるお菓子をとつてあげておくれ」と、おつしやつた時は今まで、こんなにして、かわいがつて下さるおとう樣がなぜ、こんな重い御病氣になつたかと思ふと、涙がでゝまゐりました。

おかあ樣も、私の、えらくなるやうにと、思つていらつしやいます。又、人に親切にしてあげておくれ、いるものがあるなら、なんでも買つてあげると、おつしやいました。

今は、私はいつしやうけんめいに勉強して、父母に、おせわをかけないやうにせねばなりませぬ。おほきくなつたら、えらい人になつて、父母にらくをさせて、おからだをおぢやうぶにしてあげやうと思ひます。

「限りなく嬉しき物は親と子の笑みたる顔を見つるなりけり」と、古人の讀まれましたのも、尤も至極と存じます。家内中、美しくまゐりますには、互に讓り合ひ、互た賞め合ふことが、肝要であると存じます。それにつき、面白いお話があります。或る田舍に、二軒家がありまして、一軒の家は、内同志で、朝から晩まで喧嘩の仕通しで、お隣のお家は、いつもニコ〳〵して、仲よく暮して居たさうであります。或日、朝から晩まで、家内中喧嘩の絶にたことのないお家のおかみさんが、お隣りのおかみさんに、汝のお家は、いつ見ましても、皆さんが、仲よくお暮しで、お羨ましく存じます。私の宅は御承知の通り、毎日々々、内同志喧嘩の絶える間がありませぬ。どうしたものでありませうかと聞きました。ところが、お隣りのおかみさんの申されますには、汝のお家は、お利巧なお豪い方ばかりのお揃ひでありますから、それで喧嘩が絶えないのでありませう。私の宅は、愚かなものばかりの寄り集りで、何をするにも、互に尋ね合ひ、手落のないやうにしてまゐりますから少しも衝突が起りませぬと申されたさうであります。

人は、なるべく、心を弘くもち、他人の身上につき、わるい風聞などきけば、お父様や、お母様のお顔にかゝることを耳にした時の心持と同じ心持で、人様のことは、之を賞めても、決して之をわるく言はないやうに心掛け、常に自分のことは、嚴しく之を責め、人のことは、寛大にしてまゐれば、一家の和合は申すまでもなく、小は一村の和合、大は一國の和合を計ることが出來やうと思ひます。

一家の圓滿にまゐりますには、内同志の間に、秘密があつてはなりませぬ。

昔、或處に、與作と云ふ孝行者がありましたが、父與兵衛が世を去つてからは、明け暮れ父を慕ひ、今一と目父の顔が見たいと、焦がれて居たさうであ

ります。すると、或時、殿様のお供人足となつて、都へ上り、田舎者の物珍らしく、彼方此方を彷徨いて居るうち、或鏡屋の表に通りかゝり、自分の顔が鏡に映つたのを、未だ鏡といふものを見たことがないので、自分の顔とは知らず、「オヽお父さま、此處に居ましたかね、私はお父さまにお目にかゝりたうて〳〵」と、突然鏡に抱き付いて泣き出したから、番頭は喫驚いたし、だん〳〵様子を聞いて、此の鏡が欲しいことかと思ひ、「そんなに欲しいなら金を出しなさい」と申したところが、與作は、うれしさの餘り、財布をはたいて、之を買ひ取り、大喜びで、我が家に歸つたが、餘り人に會はせては、お父様が蒼蠅がつて、又何處かへ行かれてはならぬと、家内にさへ内々で、密つと、天井裏の古長持の中へ入れ、朝夕梯子で上つては、其れを開け、ニコ〳〵喜ぶ父の顔を見て、喜んで居られたさうであります。すると、家内のお芳が、「この頃、なんだか、様子が變だ、天井裏に何かあるのか知らん」と、夫の留守に、梯子を懸け、上つて往つて、古長持を開けて見ると、自分と同じ年頃の女が居たから、夫が歸つて來ると、此の間から様子が變だと思つて居たら、私といふ歴然とした家内があるのに、彼んな女を連れて來てと申されれ、夫婦喧嘩をせられたさうであります。その處へやつて來たのが、念佛庵の妙珍といふ尼さん、まあ〳〵と双方を押し宥め、様子を聞いて、「それじや、私がそれを見定めて來るから」と、其の古長持の中を見て、下に降り、夫婦に向ひ、「いや心配なさるな、其の女は後悔して尼になつた」といふ落語がありますが、此の中に、面白い教訓があります。或人の歌にも、「立ち向ふ人の心は鏡なり己か姿をうつしてや見ん」とあつて、若い時分は、人と交はる時、彼の人は失敬な人だ、癪に觸ると思ふ事があるが、何ぞ知らん、それは先方が失敬でも癪でもなく、右の落語の様に、自分の失敬や癪が先方卽ち立ち向ふ人の鏡に映つて居るのであります。「我れ人に辛らければ、人亦我れに辛し」この格言もあり、又「われよきに人のわろきはあらばこそひとのわろきはわがわろきかな」といふ和歌もありますから、人を責むる計りでなく、時々

に鏡に向つて容姿を整へると同樣に、己が行ひをも省みて、人格を磨きたいものでございます。

これから先の人は、大行不「顧」細謹」など申さずに、豪い人物は必ず眞面目の點のあることを考へねばなりませぬ。私は諸葛孔明の出師の表を讀み、先帝知「臣謹愼」の句に至る度毎に、いつもその眞面目な人であつたことに感動の餘、暗淚を落すことでありますが、人間は謹愼則ち眞面目の中にゆつたりとした度量がなければなりませぬ。

たらちねの庭の教へはせまけれど
ひろき世に立つ基とはなれ

五、讀書の趣味

世の中は、自分獨りでは寂しくて、何の面白いこともありませぬ。氣の合つたお友達と、往つたり、來たりして交際すればこそ、その日その日を愉快に送ることが出來ます。書物も廣い意味から考へますと、矢張りお友達の中に加へて、よろしからうと存じます。論語の開卷第一に

學而時習「之」、不「亦說」乎。

とあります。これは、讀書の趣味を泄らされた語であります。一體、讀書には、五つの樂があるやうに存じます。第一は、書物を讀めば、古の人の知識と經驗とを分けていただくことが出來ます。

文よめは大和もろこし昔今
よろつのことを知るそうれしき

第二は、論語や、佛典や、バイブルなどのやうな高尙な本を讀めば、知らず識らずの間に、孔子や釋迦や耶蘇の氣高い人格に私淑することが出來まして、德性修養上、得るところが少くありませぬ。第三は、東西文豪の物せられました詩文集などを讀みますと、高尙な音樂を聞いたときのやうに、我れを忘れて、恍として、天にものぼるが如き心情を惹起せしめ、世の苦悶を忘

れることが出來ます。第四は、古人の文よまで何につれつれ慰まむ春雨のころ秋の長き夜と詠ぜられたやうな譯で、病中無聊の時なども、輕いあつさりとしたことを書いた、罪のない本を繙けば、無聊を慰むることが出來ます。第五は、旅行などの時も、書物のあるお蔭で汽車汽船の中に坐して、古の人と語り合ひつつ、退屈することもなく何時の間にか目的地に到著する事が出來ます。

前申しましたやうな譯で、讀書は、知識を弘め、德性を養ひ、趣味を深くし、慰安を求め退屈を防ぐと云ふ、五つの樂があります。ところで、人とお交りいたしますに、お友達を選ばねばなりませぬと同じく、書物を讀みますにも、どのやうな本を讀んだ方がよろしいか、その書物の選擇をすることが、大切であります。朱に交れば、赤くなると申しますが、惡い書物を讀みますと、知らず識らずの間に、極端な樂天主義に陷り、飲め食へ、歌へと、無益な散財ばかりして、品性の墮落するやうなこともあれば、又世の中をつまらなく思ひ、それからそれと煩悶の上、人生を無暗に悲觀するやうなこともあります。エマーソン氏は、讀書の選擇について、次のやうに申されたさうであります。

一、出版後、日の淺い本は、之を讀んではなりませぬ。

二、有名でない本は、之を讀んではなりませぬ。

三、自分の爲にならない本は、之を讀んではなりませぬ。

ヒル氏は、二度以上、讀む氣のする本でなければ、之を讀んでは、よろしくありませぬと、申されたさうであります。

或一種の小說など讀むは、墮落した人を、お友達に持つと同じく、大層害になります。それにひさかへ、然るべき偉人の傳記例へば、プルターク氏の著作に係る英雄傳などを讀むは、志を立つる上に、善い刺戟を與へます。この書は弘く愛讀せられたもので、モンテイギウウ、アルフイエリー、シルレル、

フランクリン、ナポレオン、ローランド夫人、ヘンリー四世、チューレン、ナピール諸氏なども常に座右にこれを備へ、古英雄の俤を偲び、品性を養はれたさうであります。或人は、古今を通じ、最も人々に感化を與へました書物は、第一がバイブルで、第二はブルターク氏の英雄傳であらうと申された位であります。

少年時代に、偉人の傳記を讀みて發憤し、人格を磨き、立派なお方になられた向が少くありませぬ。リンコルン氏などもその一人であります。氏は十五六の時分に、イッツブ物語だの、天路歷程だの、ワシントンの傳などを讀んだものと見えます。或日のこと隣りへ行つて、

ごうかワシントンの傳を貸して下さいませんか

と願つたところが、快く貸して下されましたから、お家の堀立小屋にかへり、一生懸命にそれをよみ、ワシントンが小さい時、お庭の櫻の木を切つた際、お父樣が、

これは、誰が切つたか、

とお尋ねなさると、正直に

私が切りました、

と云つて、お詫を申した事から始めて、だん〳〵大きくなるに從ひ、河に溺れて居た子供を救つた勇氣や、獨立軍の大將となつたことや、大統領となつたことなどを見て、非常に感じ、志を勵まされたさうであります。

盛年不重來一日難再晨　及時當勉勵　歲月不待人、

と云ふ陶淵明の作られた名高い詩がありますが、人は若い時分から、一生懸命に勉强せねばなりませぬ。唐の韓退之が、そのお子が、快活な心を興して、學業に勵むやうにと望まれて作られた勸學の詩に、

其許、御存の通り、木材にても、大工の手にかゝりて、それ〴〵の器物に作りなされ候と同樣、人も學問を勵み候てこそ、生れし詮も立ち申すべけれ。愚人と申し、智者と申し、生れながらにして、異なり候にては、之れ

無く、心掛一つにて、如何樣とも、成り候事にて候。父が知れる處に、同じ程の小兒二人罷在候ひしが、二三歳が程は、素より何の差別のあらう筈もなく、打寄りて、頑是なく遊び戯れ候内に、追々と成人致し、やがて、十二三とも相成候頃には、之れはと思はれ候ふしぐ〳〵ども、折々見受けられ候程に、二十三十にも成り候ては、天地霄壤も啻ならずかけ離れ申候。一人は出世して、時めき候に引きかへ、一人は零落して、辛き月日を送りたる事にて候。之れと申すも、若き時の心掛一つに由り候事にて、思へば怖しき事にて候。あはれ金銀珠玉の寶にも、増して貴きは、身に付ける學問才覺にて候べくや。如何程遺ひ候へばとて、無くなるやうの事もあるまじく候。其許御存の通り、身分もなき人の子にて、立身出世して、世に時めき候人もあれば、名門の末にてありながら、其の日の餬口にも、困却致し候程の人も少からず候。所詮は、人の上に立つ身分になり候事も、一生を人に追使はれ候事も、何れも其の身の心掛一つにて、門地には因り申さずと合點せらる可く候。

凡そ、文章は聖賢の道を拓く、鍬鋤にも譬へつべきものにて候へば、其の稽古疎略になさるまじく候。何事を學ぶにも、其の場限りにて、永續き致さず候はゞ、何の役にも立つまじく候。學問を勵み、聖賢の敎を聞き、古今の事理に通じてこそ、人たる道をも、誤る事なく、履行ひ得らるゝ事にて、さもなくば、形こそ人らしけれ、其の所行は、禽獸と何の異なる處か之れある可き、身を立て家名を揚げん等とは、思ひもよらぬ事にて候。よく〳〵心せらるべく候。昨今秋冷身に適し候へば、燈火自ら親しむ可く、讀書の季節今を措きてあるべからず。父は片時も其許を忘れし事之れなく候。善きにつけ、悪しきにつけ、案ぜらるゝ親心に、此事書きつゞりて遺し候、ゆめ〳〵怠るまじく候也。

右の心持を歌つてあります。若い時に、勉強するばかりでなく、老年となつても、矢張り、書物を精讀せらるゝことが、大切であります。世間には、學

校時代に、非常に勉學せられた方で、世の中へ出らるゝこと、世話しいやら何やらで、さつぱりと、讀書をなされぬ人がありますが、これはまことに殘念なことで、讀書を止めますと、弘く友を千古に有し、智を世界に求むることが出來ませぬ。隨つて、段々と、時勢後れの人物となります。それで、生のあらん限り、讀書の美風を繼續することが、肝要であります。孔夫子が、晩年に、

吾十有五而志二于學一、三十而立、四十而不レ惑、五十而知二天命一、六十而耳順、七十而從二心所一レ欲、不レ踰レ矩。

と申さるゝことが出來ましたのも、讀書と經驗とに依り、修養を積まれた賜であると存じます。

先年、歐米へ旅行した時のことなど、考へ出して見ますに、太平洋航海の十數日間も、西比利亞横斷の十數日間も、書物のお蔭で、何の退屈もむく、至極愉快に旅行が出來た次第であります。自然の景色を眺めながら、時々好いた本を相手に、その日を暮すと云ふことは、人生の幸福であらうと存じます。世話しい間にも、讀書の時間をこしらへ、古人の簡編を繙き、活動の方針を誤らないやうにすることは、至極、肝要なことゝ存じます。

今はとて學ひの道におこたるな
ゆるしの文を得たる童はへ

六、自然に對する愛好

自然も一大書物であります。春の朝、秋の夕、自然と交り、雅懷を詩や歌で表はすも、人の心を慰め、心身の休養になります。それで、人間は、心を自然に託し、四季の眺を賞し、野邊の花を愛し、思を風月に寄せ、所謂英雄の胸中、閑日月ありと云はれるやうな氣分がなければなりませぬ。頭腦の勞れました時、何も仕事が手につきません日でも、ブラ〳〵と郊外を散歩し、新鮮な空氣に浴し、山や河の姿を見るにつけ、何時の間にか、頭が輕くなります。

或人の作られました新體詩の中に

詩人よ君を譬ふれば　光すくしき夕月か
身を天上にとめ置きて　影を下界の塵に寄す

と云ふ句がありましたが、凡ての人々に、この詩人の氣分を、少しばかり吹き込みたいものであります。月の皎々たる夜分、蒼天に星のキラ〳〵と輝き渡れるを仰ぎ、天地の雄大なる景色に感化され、小さき浮世の不平など、何時の間にか消え失せ、天地人融合の氣合になるも、餘韻の深いことであります。

詩人のやうに尊い御心で、淡白にニコ〳〵したがら彼此御指導なし下さるる人々の深情には、誰も言ふに言へない微妙な感化をうけ、無我無心な幼兒の天眞爛漫な德をお手本として、草花の美しい風を愛し、小鳥の優しい聲を賞しながら、心の德を自然の美と同化したい心持になるものであります。而して人も自然の美しい景色に抱かれ、赤坊のやうな心で居りさへすれば、一生何一つ悔ゆるやうなこともなくて、無邪氣にのび〳〵として、樂しく世の中を渡ることが出來やうかと存じます。それで、どこ迄も、世の罪しらぬをさなごを友とし、美はしい生活をして見たいものであります。十人十色、人の心もさま〴〵で、その樂も一樣に申されぬやうでありますが、海岸などへ、子供を伴はれて遊びにまゐり、波のうち寄する側で、子供の砂をいぢりながら、頑是なく戯れ遊ぶを見るも、親御にとりては、この上もない面白いことであらうと存じます。而して何よりも奥床しいは、いつても春風絶えぬこの庭に遊びて君が齡のふへしと歌ひながら、衆と樂を共にせられつゝ、日月星晨、山川草木の姿に心を寄せ、天地自然の風韻に多大の趣味を有せらるゝ方の性行であります。公園のやうな森の中に書齋を設け、古の人のかくれた書物など讀みながら、朝夕　庭の面を眺めつゝ、お池のわきの芝生へ、お弟子などご集め、之を敎へ導きつゝ、月日を送ることが出來ましたならば　人生こして、どれほど愉快でありませうか。昔の家塾のやうな、師弟の間に、温い情の通うて

居る學校でないと、善い人物は造られないやうに存じます。温情春の如き學風の教育機關を、公園のやうな森の中に設け、天地のマコトの德に則り、自然の幾久しく變らないところの、永久的な神格を養はせ、どこまでも公義心に基いて、いみじき活動振をさせたいものであります。

風致を保存したさに、古跡に

古き樹木は、この里の歴史を語り、風致を保つものなれば之を大切にせられたし。

右のやうな立札のあるは、之を書かれた主の心が、何となく奇しく尊くうけられます。頭腦の勞れました時は、郊外をブラ〳〵と歩くか、又家で庭いぢりをするかが、一番からだのために工合がよいやうに思はれます。特に、山河の姿、日月の光に惚れて、天の莊嚴、地の美麗に、いつも胸をゆるがして、この世をば、かりの世と思へる身にとりては、親子の情を重んじ、人事を忽にせざる心掛の中にも、やがて天に昇り、お月樣のやうに、いつも年をとらないで、赤坊のやうにわか〳〵として、にこやかに世を照して居りたいものであります。

思ふことつくろふ事もまたしらぬ
幼こゝろのうつくしきかな

七、生産的勤勞

人は、自然のわざの妙なるを玩びつゝ、床しい人格を養ひながら、勤勉力行してまゐる中に、言ふに言へぬ樂の湧き出るもので御座います。世界の歴史を讀み、世の移り變りに就いて、つく〴〵と考へて見ますに、西暦第十六世紀前後は、歐洲諸國も、餘程人口が增加し、衣食住に困難を感ずるやうになり、誰も彼も、世渡りは、なか〳〵辛いと言ふ風で、其結果、宗教に、文學に、美術に、いづれも、それからそれへと、世を厭ふ性質を帶びてまゐつてゐます。幸に、新航路の發見と共に、舊大陸の人々が段々と新大陸へ移住しまし

たから、歐羅巴の人口が、稍調節せられ、自然と暮し易くなりかゝつたところへ、十八世紀から十九世紀にかけ、學術の進歩に伴れ、機械の發明と共に、生産力も急に增加しましたので、人心も何となく浮き立ち、凡ての調子が、樂天的に傾いてまゐりました。然るに、又月日の立つに伴ひ、何れの國も、大概人口の增加する一方でありますから、次第に生存競爭が激烈を加へ、生活難の聲が大きくなるばかりであります。それで、安閑茫然としては居られませぬ。一生懸命に仕事から仕事に進み、誠實に活潑に努力せねばなりませぬ。人間は、精神的に獨立しますと同時に、經濟的に獨立することが大切であります。意思の自由を保ち、自ら安んずる境遇を造りますには、獨立自營の方法を立て、人に迷惑を掛けないやうにしてまゐる心掛が、何よりも大切であります。古の人が、恒産なければ、恒心なしと申されましたが、人は一定の職業がありまして、それから一定の收入を生じ、衣、食、住に困難を感じないやうでなければ、いつも變らないところの正しい心を保つことが、六ヶ敷い次第であります。それで、御同樣に、一定の職業があつて、生産的勤勞を重んじ勞働は、神聖なりと云ふ精神で、奮鬪しなければなりませぬ。高尙な理想を抱かない方に限り、目前の遊樂に耽り、文弱の弊に陷り、獨立自尊の氣象を喪ふやうになります。

或先輩のお話に、

人は、普通の常識を備へた上、身體が健康でさへあれば、或程度まで資産を造り得らるゝやうに存じます。一世を風靡する大富豪になりますには、其人の技倆が著しく勝れて居る必要がありますけれども、日々の生計に困らない位の相當な資産は、少し心掛がよければ、何人も造り得らるゝことと存じます。

相當な資産を造るには、如何なる心掛が大切であるかと申しますれば、入ることを計り、出ることを制してまゐると云ふことが、最も肝要であります。世の中を見渡すに、多くの人は、入ることを計らず、出ることを制し

ない、風があるやうに存じます。例へば、毎月十圓の給料を貰ふものは、七八圓にて暮すやうにいたし、二、三圓は之を殘し、病氣其他の時の臨時費に充てるやうに、貯へて置かねばなりません。それを毎月十圓の給料を貰ふものが、月々、十圓以上を使ひますれば、段々と祖先傳來の家産をなくし、お仕舞には、借金までもして、人々に迷惑をかけるやうなことになります。世間の人は、動もすれば、月々、給料の中から、少々づゝ殘して、三十ヶ年貯金したところで、僅に二、三千圓位にしかならぬ云々など申し、彼此煩悶する向も少くありませぬ。しかし、私の考へでは、入ることを計り、出ることを制し、着實に暮してまゐる方ならば、世の中に、永く埋沒して居ないことゝ存じます。心掛のよい人ならば、何時の間にか、世間の人から信賴せられ、重く用ひらるゝやうになります。隨つて、相當な資産を造り得らるゝことは、疑なき次第であります。又心掛のよい眞面目な人ならば、自分が獨立して、商賣を始めるにしても、顧客が增して、其店の繁昌することは、必然の結果であります。

蒔かぬ種ははえぬと云ふ語がありますが、今日、國家の富も、社會の文明もいづれも皆昔の人々の勤勞に依つて遺されたものであります。棚から牡丹餅と云ふ諺から、考へて見ましても、惰けて遊んでばかり居て、甘いことのあらう道理はありませぬ。それで古人の業精於勤、荒於嬉、と申されました、語などを味ひ、額に汗を流して、一生懸命に働きますことが、家を富まし、國を豐かならしめる基であります。而して、人の身體は、ブラ〳〵して居ますと、錆がつきますが、仕事から仕事に向つて、一生懸命に働いて居りさへしますと、ごこもピカピカと光り出すやうな心持がいたし、大層、身體のためによろしくあります。或人が、親讓りの財産で、贅澤なことばかりして、ブラブラとその日を送つて居らるゝ方は、朝から晩まで、手足を使ひながら、田畑の中で、骨折つて働いて居らるゝ人に比べますと、大層不仕合せであると申されましたが、如何にもその通りであります。

もつ人の心によりて寶ども
仇ともなるは黄金なりけり

若いうちの苦勞は、願つても之を持てと云ふ言がありますが、若い時分から一方ならぬ難儀をして成功なされた御主人に限り、如何にも一種の同情に豐かなものであります。隨つて、人を使ふにも、常に思ひやりに富んでゐますから、使はるゝものも、益々その御主人を敬ひ尊び、御主人の床しい人格で、主從の關係が立派に保たれてまゐります。

稼ぐに追付く貧乏なしと云ふことがありますから、人は、苦勞を厭はずに、分に安んじて、よく働かねばなりませぬ。而して働いて出來たお金は、之を無益に使用せずに、貯金して置くことが、大切であります。塵も積もれば山となると云ふ諺の通り、例へば、一圓の貯金に、五分の利息がつくといたしますれば、二十年目には、二圓になります。而して二十ヶ年立つに伴れ、倍になりますから、最初から勘定しますと、四十年目に四圓、六十年目に八圓、八十年目に十六圓、百年目に三十二圓になります。一圓のお錢が、五歩の利息で、据へ置けば、百ヶ年目に三十二倍となりますから、二百年目には三十二圓の三十二倍、則ち一千二十四圓になり、三百年目には一千二十四圓の三十二倍、則ち三萬二千七百六十八圓になります。

單利の計算でも、右の次第でありますから、重利で計算しますと、今一層巨額に上る譯であります。この貯金の心掛をもつて、物を無益に致さないやうにしてまゐれば、一家の暮し向きもよくなり、家内同志、にこ〳〵と愉快に、その日を送ることが出來るやうになり、見るもの、聞くもの毎に、面白くうけとらるゝことになります。衣食足りて、禮節を知るとか、小人窮すれば、こゝに濫すなど云ふ語がありますが、兎角一家の不和、社會の罪惡などは、貧窮に基くものが少くありませぬ。俗に「やけは貧から」と申しますが、貧乏と云ふものは、洵に恐ろしいものであります。

年々に思ひやれども山水を

汲みて遊はん夏なかりけり

八、公共事業に對する同情

人間は、社交的動物でありますから、山の中へ這入り込んで、生涯を寂しく暮すことの出來るものでありませぬ。歌にも、

限りなく嬉しき物は親と子の
笑みたる顏を見つるなりけり

とある通り、親子兄弟、互に思ひ、思はれて、その日を暮してこそ、働くにも働きがひのある次第であります。世の中に、悲しいことのあつた時には、之をうちあけて慰めてもらひ、嬉しいことのあつた日には、之を告げて、喜んでいたゞく人のあればこそ、喜はいよ／＼喜ばしく、悲しみは、却つて、其の半ばを減じ得らるゝのであります。

旅は道づれ、世は情と申しますが、全くその通りであります。それで古歌にも、

おちふれて袖になみたのかゝるとき
人の心のおくそ知らるゝ

人情と云ふものは、面白いものであります。おいしいものでも、人と一緒に之を食べてこそ、層一層おいしいものであります。精神上の愉快は、肉體上の愉快よりも、趣味の深いもので、人樣からお珍しい物を頂戴しました時などに、自分には之を食べずに、先づお初を神棚に上げ、その餘を祖母上などに御覽に入れ、そのお喜びなし下される情が、この上もなく愉快なものであります。話は違ひますけれども、私共が毎年秋になりますと、學校の生徒と共に、修學旅行に出掛けますが、前以て注意はして置きましても、先生には、特別に、獻立の外に、玉子などつけてくれてあることがあます。そのやうな場合には、その玉子を下げさせて、生徒と同じやうにして食べた方が、心持のよいものであります。

私が學生の時分のことでありますが、或正月の元日、痛く心に感じたことがありました。それは、格別のことでもありませぬが、私は學生の時分に、數十圓の或書物が欲しいと思ひました。國許の兩親に申せば、いつでも送金して下さるものゝ、臨時の入費を請求いたしますと、ごのやうに心配をなされまいものでもないと考へ、思案の上、修學費の中から儉約して、月賦で御返濟するお約束で、或先輩から數十圓拜借したことがありました。その先輩のお宅へ、お正月の元日早々、私が年賀にまゐつてゐます途中で、小學校の生徒さんの、拜賀式が終つて、三々伍々、手に手をとり、樂しさうに歸つて居らるゝところに出遇ひました。元日のことでありましたから、ごのお子供も、相當に美しく著て、嬉々として居りました。やがて、獨り平常のまゝの粗末な綿服を著けた娘の子が、道の側を、下向いて、子供心にも、靜に何か考へ込んだ風で、歸つて行きました。私は、その子の樣子を、つく〴〵と見送りながら、貧富懸隔の著しい、今の世の中のことなど、それからそれへと考へ、ごちらの親御でも、親御の情として、假令自分は敝衣を著ても、子供だけには、世間相當に著せて、外へ出してやりたいは、人情であらうに、彼の娘の家は、よく〳〵暮し向が不自由であらうと思ひながら、同情の餘り、貰ひ泣きをしましたことでありました。

以前私の家に、ダスと云ふ愛犬がゐましたが、或日のこと、その犬が馬に蹴られました。私がその傷口に、お藥をつけてゐますと、ミス、ローダスカ、ワイリック先生も可愛さうにと申して、其處へまゐられ、いろ〳〵介抱して下されました。ワイリック先生は、物の哀れを、よく御存じの御方で、或日などは、まるで一面識もない目の見えない不自由な方を、新橋から、その人の御國許なる淡路島まで、送つて行つて上げられたこともあれば、又或時などは、苦學生に、お錢を出してやり、之等の人々に、このお錢は、私一人のものではありませぬ。神樣のお錢であります。遠慮しないでお遣ひ下さいませと申して居られました、生前それからそれへと善いことを遊ばされ、陰

徳を積まれましたワイリック先生は、ナイチンゲール孃のやうな、同情の深い、信仰の厚い、お方でありましたが、先年重い病に罹られ、日本でおかくれになりました。そのお姉樣は、まだ御無事で亞米利加に居られますが、先生の御命日には、必ずお手紙を送つて下さいます。私はワイリック先生からアブラハム、リンコルンの肖像をいたゞきましたが、之を見るにつけましても、リンコルン氏が、幼い時から、一方ならず苦勞をせられ、お仕舞に大統領にまでなられ、人民の幸福ばかり考へて、下々のものに深い同情を寄せられましたことを思ひ、流石にワイリック先生のお形見として相應しいものと思ひながら、微妙の感化を受けて居る次第であります。

幼者を勞はり、老者を助け、病める者を救ひ、貧しき者を憐み、社會の安寧を計つてまゐりますことは、一時も之を忘れてはなりませぬ。相互に、孔子の仁と申され、釋迦の慈悲と言はれ、基督の愛と說かれた徳を、この上とも十分に養はねばなりませぬ。或實業家は、

人はお茶屋に腰を掛け、一碗の澁茶を喫したばかりでも、五錢や十錢のお茶代を置くが、當然のことであります。そのこと、この世の中に、生れ出でゝ、五十年六十年と長い月日の間に、君父より受けた恩、社會より受けた恩とを比べますと、天地の相違があります。然るに世間の人が、寸時休憩したお茶屋には、お茶代を置きながら、その社會、國家に對し、お茶代を置かずに死去せらるゝは、心外千萬なことであります。

と申され、御自分は、心から公共事業に全力を盡されましたは、まことに床しい心掛と申さねばなりませぬ。これから先は、貧富の懸隔が益々甚しくなるであらうと思はれます。相當に暮せる人々は、スマイル氏が、天は人の上に人を造らずと申された語を、よく味ひ、下々のものに、溢るゝばかりの同情を以て、やはらかに接して貰いたいものであります。

而して、國家としては、教育を普及させ、下層の人民にその身を立つべき智能技術を授けるとか、公費で病院をこしらへ、貧民には、藥價をとらずして、

診察してやるとか、日用必需品に對しては、稅を重くかけないやうにいたし贅澤品に重稅を課するやうにいたし、又所得稅、相續稅をば、富者から多く出さすやうにせねばなりませぬ。私人としては、慈悲愛憐を人情の花と心得、艱苦を救ひ、缺乏を賑はし、目下をいたはり、心から貧民、罹災者の救護、孤兒、白痴の養育、不良少年の感化、出獄人の保護などに同情を寄せ、慈善事業に力を盡すことが必要であります。

四邊の海皆はらからと思ふ世に
なと浪風の立ちさはくらむ

九、崇祖の氣高き精神

生したてし親なかりせはいかにして
君のめくみをわれはうくべき

世の中に、何が有難いと申しましても、親ほと有難いものはありませぬ。東西も辨へぬ、幼い時から、それからそれへと、慈しみ育てく下されました、御恩のほどは、海よりも深く、山よりも高い次第であります。それで

仰き見る富士の高嶺のそれよりも
たかきは親の惠なりけり

と云ふ古歌もあります、さても〳〵、大正二年九月二十三日は、私にとりて、生涯忘るゝことの出來ない日で、この日は、最愛の母か、この世を去られた日であります、母の亡くなられた頃、友人某博士の私を慰めて下されたお手紙に

謹啓　御母堂樣久々御病氣の處、御養生不被爲叶、遂に御永眠被遊候由、本日の朝日新聞紙上にて承知致驚入申候。御一同樣御愁傷御落膽の程、御遙察申上候。小弟も、先年父を亡ひ候が、生前は、始終遠隔致し居り、何時迄も存生致樣の心持にて、別段の扶養も盡さず、今更殘念に存居候。貴兄には、平素より御孝養厚く候事故左樣の御遺憾も少かるべくと存候へ共

御胸中、色々御推察申上候樣の次第に御座候。先は右不取敢御弔詞迄、匆々申述候。不備。

子供などの生ひ立ち、大きくなるを見るにつけましても、母が今日までも御無事であれば、かくもしてあげたいと、色々思ひますけれども、今更致方がありませぬ。一周忌に物して供へました、一小册子母の御聲を讀み、妹に遣はした文を見るにつけても、母の面影、今も眼の前に、チラ〳〵いたし、何となくなつかしく存じます。

一筆申上げ參らせ候、朝夕は、涼しく相成申候。別にお障りも御座なく候や、お伺申上候。光陰は矢の如し、この二十三日は、母上の御命日にましませば、秋風、何となく身にしみ、悲しとも悲し、東京にて祭典執り行ひ候上、國許へ墓參にまゐり度心組に付、親戚一同へも、よろしくおつたへいたゞき度候

明日ありと思ふ心の仇櫻

夜半に嵐の吹かぬものかは

いつまても、母上の御やさしき御言葉を聽けるやうに思ひしは、夢か幻か。このせつは、せめてもの心やりにと思ひ、母上の御寫眞を、ひきのばしにいたさせ、額にかけ、お慕ひ申居候。蟲の音も悲しき秋の夕、子供等の、何心なく小學讀本の一節を、

あかんぼのときに、だいて、ちゝをのませてくださつたのは、どなたですか。

と讀むを聞くにつけても、幼き頃、母上に手を引かれて、氏神の森へ、椎の實など拾ひにまゐり候事や、家の前を流るゝ小川へ、母上の洗濯にまゐられけるにつき隨ひて、遊びに行きけることなど、思ひ出し候へ者、母上のいとしきお姿、眼の前にチラ〳〵あらはれ、お聲をかけらるゝやうの心持もいたし候。其許も、母上の御聲今も耳の底に殘り候うて、得忘れざるこゝ存じ候。われ等の今日あるは。偏に御先祖の御遺德に依り候事と、忝

く存じ候、乍末筆皆々様へも、よろしくおつたへいたゞき度候。　かしこ

九月二十日　　兄より

古人の

親の身の日々のいのりは生の子の

末榮えよの外なかりけり

と詠ぜられました歌の心を味ひ、この上は、子供を一人前のものに育て上げ、御先祖の、志を空しくしないやうに心掛くるが、何よりも、亡き親々へ對する道であると存じます。毎朝、神棚にお燈明を上げ、祖先を敬ふ心は、まことに床しいものであります、旅立などのときも、小さい聲で、生ける人に物云ふ如く、祈り奉る習ひも、之を幾久しく子々孫々に傳へたいものであります。

歐米漫遊中、荆妻の寄せました文に、

北米ワシントン府より御投函の御玉章難有拜讀仕り申候、御一行ホワイトハウスにて、大統領ルーズヴエルト氏及同令夫人に、御面謁相蒙られ候由何よりも光榮と存じ奉り候、留守許も諸先生始め、皆々様方、彼此御親切になし下され、子供も、日毎に成人にて、いづれも指折りて御歸朝の日を樂しみて、お待ち申居候。

國をおもふ心のふかき子ならすは

親にもあさき心ならまし

幾久しき中に、子供の行末も、見定めたきものと、心窃に之を樂しみながら、私も、健やかに、立ち働き申居候間、萬づ御心易く、思召しなし下され度候。御心にかけさせ給ひ、度々御文惠贈の御禮かたゞ〳〵先は右迄、

あら〳〵かしこ

私は、父母の膝下を離れ、京都や東京へ遊學に出掛けましてから、一週間に一回は、必ずゞ〳〵手紙を出して父母の安否を伺ふことに定め、このことは實行いたしました。修業中などに、親兄弟から度々おやさしいお手紙をいたゞきますと、一生懸命に勉强して善い人にならねばならぬと云ふ志が、益々堅

くなり、大層學問の奬勵になるやうであります。毎晩、お床についた時、その日〳〵のことを考へ、親兄弟や御先祖のことなど考へますと、少しでも、善いことを多くしたくなるものであります。私共の今日あるは、全く御先祖のお蔭でありますから、一時も御先祖のことは、忘れてはなりませぬ。私なども、幼い時分から、父母の敬神崇祖の風に化せられ、國許へ歸りますと、吾が家に這入らない前に、先づ一番に御先祖のお墓へ參拜する習慣にして居ります。

長者の爲めに枝を折り、幼者の爲に靴を拾ふと云ふ語がありますが、目上の人にやさしく仕へ、幼少なものを慈しむは、何よりも樂しいものであります。

一、すめら御國のますらをよ　上を敬ひ下を撫で
　守れ御國を我が家を　帝の御國親の家
二、天そゝり立つ高千穗の　高き姿を仰ぎつゝ
　休まで登れけはしこも　たゆまで進めつらしこも
三、すめら御國の中堅と　誓ひかはせる同胞よ
　尙いや高く日の御旗　世界の上に輝かせ

外國などへまゐつてゐます時など、日本の國旗をたてた、商船などが、港へ這入つて來るを見た時の心持は、言ふに言へないものであります、われ〳〵日本人は、祖先以來の遺風を守り、秩序を重んじ、皇室を中心として、着實に活動せねばならなりませぬ。

千早ふる神のこゝろにかなふらむ
　我か國民のつくすまことは

一〇、餘　韻

人生の幸福に關する七綱目を、繰返して申しますと、その第一は、健康の快樂であります。身體に、申分がなければ、人にお目にかゝりましても、ニコニコしながら、お目にかゝることが出來ます。何となく、世の中が愉快であ

ります。さればこそ、健康は、幸福の母と云ふ諺もあります。第二は、家庭の團欒であります。毎日、元日の朝のやうな清々した氣合で、親子兄弟うち揃うて、その日、その日を無事に、樂しく暮すお家は、何よりもお仕合せであります。第三は、讀書の趣味であります。論語に、學而時習之、不亦説乎とありますが、古今の書物を讀み、人格を研きますことは、何よりも結構なことであります。第四は、自然に對する愛好であります、廣い意味に於て自然も一大書物でありまして、天然の山や河を、お友達とし、四季の草花などに眺むる中に、人の心は和げ慰められるくものであります。第五は、生産的勤勞であります。朝から晩まで、一生懸命に働きますことは、まことに善いことでありまして、親讓りの財産で、ブラ〳〵遊んで暮す人に比べますと、朝から晩まで一生懸命に働いて居ます人が、よほど尊くあります。第六は、公共事業に對する同情であります。人は、相當に暮せるやうになれば、慈善事業や公共事業に骨を折ることが、床しい心掛であります。第七は、祖の氣高い精神であります。自分の子や孫を可愛がり、子孫長久の道を立てますことは、御先祖を大切にすることになります。

遠い處へまゐりますには、近い處から行かねばならぬやうに、高い處へ登りますにも、卑い處から登り初めねばなりませぬ。

怠らず行かは千里の外も見ん
牛の歩みのよしおそくとも

身が修まれば、家も齊ひ家が齊へば、町も村も繁昌するやうな次第でありますから、先づ第一に、

よしあしを人の上には言ひながら
身を顧みる人なかりけり

御製の心を服膺して、身を顧み、德を研かねばなりませぬ。而して、人のわるい風聞など耳にした時は、なるべく自分の父や母の顏にかくることを聞いた時のやうな心特で、どこ迄も人情を盡して、親切な態度をとることを忘れ

ないやうにせねばなりませぬ。積善の家には、餘慶ありと言ふ語があります
が、善い行を多くいたしますれば、子孫が仕合せを受くることになります。
私は、以前國許の町村へ、次のやうな心得書をまはし、戸毎へ配つていただく
いたことがあります。

一、村會、町會、府會、衆議院などの議員は、誠實な人を選ばねばなりま
せぬ。

よき人と知らば敬ひ愼みて
その正直を習ふへきなり

二、神社、佛閣を大切にし、御先祖の祭祀を忽にしないやうにせねばなり
ませぬ。

目に見にぬ神の心にかよふこそ
人の心の誠なりけり

三、婚姻、葬儀などの際、虚禮を避け、無益な入費を省くやうにせねばな
りませぬ。

事たれはたるにまかせて事たらす
たらて事たる身こそやすけれ

四、入隊、除隊などの時に、送り迎ひをなし、勤儉尚武の風を興すやうに
心掛けねばなりませぬ。

敷島の大和心を人とはは
あさひににほふ山さくら花

五、流行病にかかつた時は、早く屆出で人に迷惑をかけないやうにいたさ
ねばなりませぬ。

まこころの鏡を常にみかきつつ
胸にたなひく雲をはらはむ

六、お隣り同志睦しく致し、吉凶、互に助け合ふやうにいたさねばなりま
せぬ。

おのか子を惠む心を法とせは
學はすとても道にいたらむ

七、人のいやがるものを、人家の近くにこしらへないやうに氣をつけねばなりませぬ。

あやまたんことを思へはかりそめの
事にもものはつつしまれつゝ

八、風俗を害するやうな場所に、立ち入らないやうに注意せねばなりませぬ。

かはかりのことは浮世のならひそと
ゆるす心のはてそかなしき

九、互に賞め合ひ、土地の風を善くするやうに努めねばなりませぬ。

あなかちに人をわるしと思ふなよ
人の惡きはわかわるきなり

一〇、渡世に精出し、子供の教育に骨を折らねばなりませぬ。

白金もこかねも玉もなにかせん
まされる寶子にしかめやも

記念碑の篆額に、

常識＋信念＝物質＋X
無窮大＋〇＝不滅不死

右のやうな二つの方程式を載せました。第一の方程式は、平常は、固より常識と物質とに對する圓滿な思想さへあれば、都合よく世渡りが出來ますけれども、いざと云ふ非常な場合には、常識や物質に關する考へばかりでは、問題を解決することが出來ませぬ。そのやうな變に通ずる道は、神々しい信念とかXとか云ふ道具に訴へ、斷々乎として、所信を貫くと云ふ決心が必要であることを表はしたもので御座います。

吹く風の心のまゝになひけとも

をれぬや竹のみさをなるらん

第二の方程式は、一歩を進めまして、世の中を救ひますには、事物を離れまして、無窮大に或ものを寄せたものが、不滅不死であると云ふやうな、現代を超絶して、所謂高處から下界を見下したやうな神々しい氣分で　孔子や耶蘇や釋迦や、ソクラテスの犧牲的精神を學ぶこと肝要があることを示したものであります。目前の我の爲に、眞我の裏切られないやうに心掛けねばなりませぬが、或先輩の無我の二字を解釋されました言に、

無我と云ふ樣な話になると、餘程六ヶしくなつて、山の中へでも這入つて、坐禪でも組むでからでないと、出來ない藝當の樣でありますけれども、そんなに六ヶしいわけのものではない樣に思ひます。自分の受持つた仕事に、一心不亂に力を込める事が、卽ち事實上の無我の境であります。軍人が戰場へ出でゝ軍をして居る時には、自分の身の苦しい事や痛いことは忘れて仕舞ひます。此の氣合か事實上の無我であります。人間が此の氣合になりますと、靈妙不思儀の力が出るものであります。仕事は此の氣合に依つて進み、事業は此の氣合の集合によつて進み、人類の幸福は、此氣合に依つて、無限に進むものであります。益々エラクなりたい。益々立派になりたい。益々幸福を進めたいと云ふ事は、人間が神樣から授かつた通有性であります。我々は燃ゆるが如き煩惱の下に、無我の境と云ふ藝當も仕遂げねばなりませぬ。俗に「一生懸命であります」と云ふが、此の一命を懸けて、任務に當ると云ふ事は、語を換へて云へば、無我の境の實行であります。我々は日々の仕事に、此氣合を以て働きたい。煩惱の大海に入らなければ、無限の寶珠を得ることは出來ませぬ。

軍備の擴張も、國庫の充實も、いづれも大切でありますが、國民思想の健全は、尤も肝要なことゝ存じます。國民一般の品性が、立派になりまして、正しい床しい生活を喜ぶやうに進みますれば、この上もない結構なことであります。

昔、希臘の賢人ソクラテスは、國の寶とも仰ぐべき人民が、金を見ると、義理も人情も忘れて、目をひからせ、又口先で都合のよい事ばかり云つて、ブラ〳〵惰けて、奇麗に著飾らうと云ふ風に流れましたことを見兼ね、どうか國の爲め、この風を救ひ、眞理と道德との重んぜねばならぬことを、普く天下の人に知らせたいと思ひ、一生懸命に努力せられました。お前は、なぜ役人にならないかと人から勸められますと、

私は、政府に這入らなくとも、這入つたと同じことであります。多くの學生を教育してから、私の亡くなつた後、國民の指導者として、世に立つて貰ふ積りでありますから、

と答へられたさうであります。このやうな考で、お弟子を可愛がられましたから、お弟子も先生が常に「汝自身を知れ」と申された言を守り、つとめて艱苦と戰ひ、堅忍で勞苦を厭はない性質を養ひ、或お弟子は、

悪い方へ行く道は、平でやさしくありますから、大概な人は、この方を進んでまゐりますけれども、道德の道は、嶮しくて遠いから、額に汗を流さないと、容易に、其絶頂へ登られません。

と申され、又或お弟子は、

神樣の御褒美は、人がこの世で善い事をしやうと思うて、出遇つた苦勞の多いと少いとで、定まるさうであります。

と說かれたさうであります。二度とここの世の中に、生れかはることは、出來ませぬから、壽命のある間、少しでも善いことを多くいたし、獻身的生活をして見たいのであります。

譬へば、母親が、夜も、ろくに眠らずに、我身を忘れて、子供の病床で、看護に全力を注がれますのも、船長が、非常の際、少しもあわてずに、乘客を短艇に乘り移らせて、その安全なるを見屆け、自分は、從容として、船と運命を共にせられますのも、學者が、利用厚生の道を研究しまして、困苦缺乏を辭しませんことも、忠勇義烈の士が、國難の際、劍戟彈雨の間に、奔走しまし

て、之を避けませんことも、いづれも世を思ふ犧牲的精神の光輝であります、大人物は、非常な場合に、我に捕へられず、よく一身一家のことを忘れて、國家の爲めに、社會の爲めに、殆んど神樣と同じやうに、立派な活動振を致されます。

大空にそひえて見ゆる高根にも
のほれはのほる道はありけり

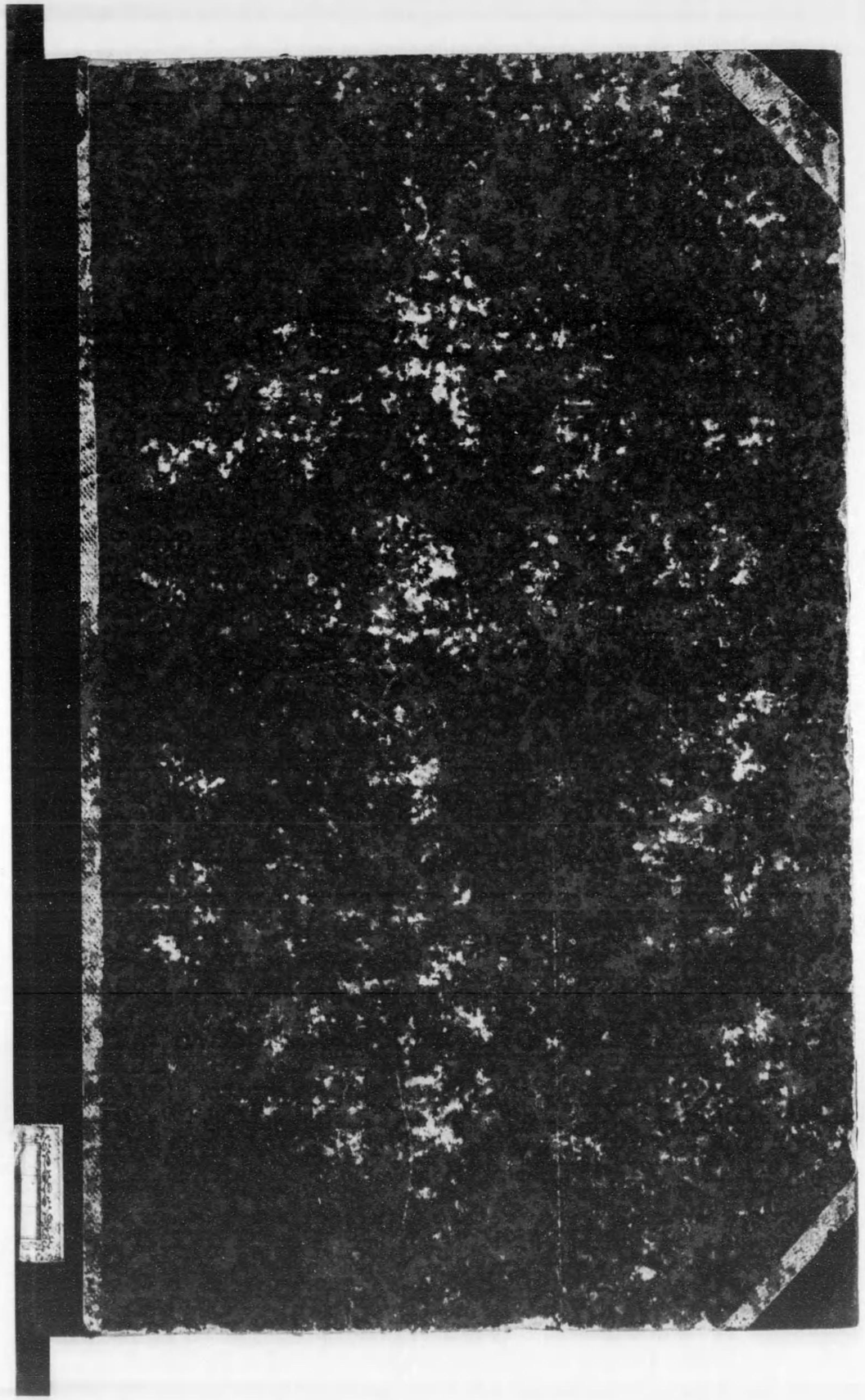
大正五年五月二十五日印刷
大正五年五月二十七日發行　（非賣品）

著作者　東京府豐多摩郡大久保町大字東大久保三百三番地　川田鐵彌

發行所　東京府豐多摩郡大久保町大字東大久保三百三番地　高千穗學校

印刷者　東京市日本橋區兜町二番地　田子與作

印刷所　東京市日本橋區兜町二番地　東京印刷株式會社

327
842

終